

講義ビデオの自己評価を用いた教授能力向上に関する実践 - 教科教育法 における学生による模擬授業を対象にした取り組み -

An educational activity for upgrading of the teaching abilities that used self-evaluation of recorded video for one's own micro teaching

太田 伸幸, 児嶋 文寿
Nobuyuki OTA, Fumitoshi KOJIMA

Abstract: In this study, it was distributed that recorded video for one's own micro teaching in teaching methods of education on the moment. It was examined that effects of upgrading of the teaching abilities particularly ability for self-modeling and for evaluation by a class of oneself looking back on contents of a description of a report made from self-evaluation prior to, just after and after micro teaching, class evaluation from the undergraduates who became students role. In a self-evaluation report, it was reported that having more correct evaluation ability by comparing self with another person, motivation for class by peer-review, and ability to capture a micro teaching of own versatily. These are descriptions to lead to self-modeling activity and evaluate own as a model objectively, and it is thought that it is connected in it coming to be possible for concrete aim setting.

1. はじめに

1.1 教職課程カリキュラムにおける教科教育法の位置づけ

教育職員免許法において、高等学校 1 種免許状取得のためには、免許教科に関する教科教育法の単位取得が必修とされている。また、必修単位数は 2 であるが、4 単位の講義を開講することが必要とされている。そのため、4 単位科目として教科教育法を開講している大学も多く存在する。

本学では教科教育法を と に分けて開講しており、 を必修科目、 を選択科目としている。教科教育法は免許教科の学習指導要領に示された概要、指導方法、評価方法、指導案の作成法などを行っている。では教材作成実習やマイクロ・ティーチングを実施するカリキュラム的な余裕が無いため、これらの項目は教科教育法で実施している。すなわち、では教科の内容的な理解を促す講義を実施し、では実践的な教科指導能力の向上を目標としている。

1.2 情報科教育法 におけるこれまでの取り組み 教職専門科目「情報科教育法 」では、教育実習にお

ける実践的な教授能力の育成を目的としている。そのため、教育実習にて授業を行う教科について、学生自身が模擬授業を計画・実施し、他の学生が生徒役となり実施された授業の評価を行っている。

各学生の授業の様子はビデオ撮影し記録しており、学生が自身の授業を視聴し振り返ることができるようにしている。記録したメディアは、2004 年度までは担当教員が保管し希望者に貸し出しをしていたが、利用希望者が少なかった。そこで、2005 年度では、授業ビデオの活用を促すために学生ごとに撮影した画像から講義ビデオ CD を作成し配布した。そして、自身の講義ビデオ CD を視聴した上で自己評価レポートを課したところ、模擬授業実施直後の自己評価と比較して、自身の授業に対して客観的・批判的な自己評価が多く認められた。

1.3 自己モデリング

このような自身の授業ビデオ記録に対する自己評価活動は、ビデオ記録によって授業の実際の場面をとらえ、教授者の自己モデリングの手段（伊藤, 2004）にあたる。伊藤（2003）は大学授業における主体的な参加を促進する要因として、自己モデリングの有効性を明らかにしている。さらに伊藤（2005）では、大学院生を対象とした

実践を元に, ビデオを視聴することで自己の問題点が明らかになり, 授業改善の手段として有効であることも明らかにした。したがって, 効率的に授業を記録し活用できるシステムを構築し, 自身の授業を客観的に振り返る視点を積極的に育成することで, 学生の教育実習における教授能力向上に対する効果的な支援が可能となると予測される。

1・4 模擬授業(マイクロ・ティーチング)

マイクロ・ティーチングとは, 授業の中のいくつかの要素を限定し縮小して, 1 単位に満たない少ない時間で, 特定のあるいはいくつかのテクニックの修得を行う(柴田・山崎, 2005) 活動である。教員採用や教員研修においても取り入れられる活動であり, 教員養成課程において実践的なテクニックを学ぶ手段として, 教育方法に関する科目のカリキュラムの重要な位置を占める(cf. 高乗・浅井, 2003)。受講生自身で 1 つの授業を作り上げていく過程において, 自身の授業を振り返ることは, 教授能力改善のためには欠かすことのできない活動となる。

1・5 本研究の目的

本研究では, 教科教育法 において, 学生が計画・実施する模擬授業を DVD ビデオカメラで撮影しその場で学生に配布する。講義内では, 生徒役となる学生からの授業評価, 授業者となる学生の模擬授業実施前, 模擬授業実施直後の自己評価を基にしたレポートの記述の内容より, 自身の授業の振り返ることによる教授能力向上の効果(特に自己モデリング能力, 評価能力)について検討する。

2. 2006 年度講義における実践内容

2・1 受講者数

教職課程を履修している 3 年生(50 名)が 3 年次後期に履修する「理科教育法」, 「情報科教育法」, 「工業科教育法」, 「商業科教育法」(工業科教育法と商業科教育法は合同で開講)を 3 クラス(15 名~19 名)に分割し, 児嶋が 2 クラス, 太田が 1 クラスを担当した。

2・2 実施方法

2・2・1 2005 年度までの取り組みにおける問題点

2005 年度までは撮影機材としてデジタルビデオカメラを使用していた。記録メディアは DV カセットであり, そのままでは自宅で視聴できる学生に限られるという問題があった。そのため, 講義後, DV カセットに記録された映像からビデオ CD を作成する必要が生じた。時間的なコストがかかるため, 模擬授業を行った回の次週の授

業にて学生にビデオ CD を渡さざるを得なかった。

また, 2005 年度は 23 名の受講者がいたため, 模擬授業は 1 人 1 回しか実施できなかった。自身の講義ビデオを視聴することによって, 客観的に自身の授業の問題点や改良点を見いだしたにもかかわらず, それを生かす機会が教育実習までなかった。

これらの問題点をまとめると, 授業ビデオ視聴メディアの問題として, 授業後直ちに自身の授業を見ることができない, ことがまずあげられる。そして, ビデオ視聴後の行動として, 客観的な自己評価を踏まえた上で, 授業を改良する機会が講義の中ではない, ことがあげられる。

2・2・2 2006 年度の変更点

まず, 記録メディアを DV カセットから DVD に変更することにより, 授業後直ちに自身の講義ビデオの視聴を可能とする。また, ビデオ画像の頭だしやスキップ再生などが容易となるため, 講義内での活用の幅がひろがると考えられる。

次に, 模擬授業の回数を 1 人 1 回より 1 人 2 回に増やし, 1 回目の模擬授業での反省を 2 回目の模擬授業にて生かせるようにする。また, 1 人当たりの授業時間が短い(2005 年度は 1 人 15 分)という意見も見られたため, 回数は 1 回のままで授業時間を長くするクラスも設定する。

2・2・3 授業時間・授業回数

児嶋担当クラスでは, 模擬授業を 1 回ずつ(希望者のみ 2 回実施)担当するため, 1 人あたりの持ち時間は 25 分とし, 1 回の講義で 2 名が模擬授業を実施した。

太田担当クラスでは, 模擬授業を 2 回ずつ担当するため, 1 回目は 12 分, 2 回目は 15 分とした。1 回目は 1 回の講義で 4 人, 2 回目は 1 回の講義で 3 人がそれぞれ模擬授業を実施した。

2・2・4 模擬授業の進め方

模擬授業の実施に際して, 学生は学習指導案を作成し, 事前に担当教員の指導を受けた。学習指導案は模擬授業実施時に全員に配布した。また, 指導内容に応じて, パワーポイント, カード, 配布プリントなどの補助教材を準備した。生徒役の学生は, 模擬授業を受けた後, 授業評価用紙を用いてフィードバックを行った。模擬授業を実施した学生も同じ用紙を用いて自己評価を行った。授業評価項目は Table1 に示す。また, 模擬授業の様子は生徒役の学生の座席後方より撮影した。したがって, 模擬授業実施後, 学生は生徒役の学生からのフィードバック用紙と講義ビデオが記録された DVD メディアを受け取ることとなった。

学期末に、学習指導案フィードバック用紙、講義ビデオ等を元に自己評価レポートを作成し、提出を求めた。本研究ではこの自己評価レポートの内容をもとに考察を加えていく。

Table1 授業評価に用いた項目

1. 声の大きさや明瞭性は適当だった
2. 授業の準備物は適切であった
3. 教材研究は充分に行われていた
4. 黒板・スクリーンの字はわかりやすかった
5. 授業時間が有効に使われていた
6. 授業内容の難易度は適切だった
7. 授業内容の量は適当だった
8. 授業の進度はちょうどよかった
9. 授業の進行はスムーズだった
10. 説明の仕方はわかりやすかったか

3. 自己評価レポートの内容

3・1 ピア・レビュー（相互評価）に関して

最終レポートにおける記述を分類したところ、まず、他者の授業を評価することに対する記述は「他者をモデルとする」「他者と自身の比較」「自身の向上」「お互いの向上」「評価能力の向上」「生徒視点の取得」の6つの観点に分類された（Table2）。

「他者をモデルとする」は、「他者の良い点を自分の行おうとする授業に取り組み、その質を向上させることに役立つ」といったように、自分が思いつかなかった指導法や指導上の問題点など、他の学生の授業をモデルとして、自身の授業の改善に役立てようとする意識を表している。さらに「他者と自身との比較」は、他者評価ではあるが、「自分自身の授業を振り返り、他者と比較して自分の授業はどうであったかを考えることが出来る」といったように、それを自分自身の行動と比較して検討する意識を表している。

「自身の向上」は、「自分に足りないところを参考にすることができる」といったような評価を行うことが、自身の教授能力の向上に役立つという意識であり、「お互いの向上」は「お互いがお互いの勉強になる」というように、自身だけでなく、相手の教授能力の向上にもつながるといった意識である。

「評価能力の向上」は、「相手を評価することにより、自己評価も出来るようになる」など、評価を繰り返し行うことで、どのような授業が良い授業なのかという、自分なりの評価基準が確立されることを表している。さらに「生徒視点の取得」では、生徒の立場で授業に参加することで、「生徒側の立場になり、どういった先生の授業が分かりやすく、どういったところが分かりにくいかが客観的に分かる」ことになり、授業を生徒の立場から

とらえられるようになることを意味する。

次に、他者に自身の授業の評価を受けることに対する記述は、「自分が気づかなかった点への気づき」「自己評価との比較」「多面的な評価観点への気づき」「問題点の明確化」「動機づけ」「評価を受ける緊張感」の6つの観点に分類された（Table3）。

「自分が気づかなかった点への気づき」は、他者評価を受けることで、「自分では気づかないミスに気づいてもらうことができる」ため、自分では気づかなかった問題点や課題を指摘されることを表している。「自己評価との比較」は、「自分が感じた問題点と一致しているかどうかの確認」するなど、他者から評価を自己評価と比較することにより、自己評価への見直しにもつながっている。そして、複数の他者から評価を受けることにより「人による感じ方の違い」を実感し、「多面的な評価観点への気づき」のように、評価の視点の広がりを実感することになる。

「問題点の明確化」は、複数の評価者より同様の指摘を受けることで、「2回目の授業では何を気をつけるべきか、本番ではどんな授業をすればよいかなどがはっきり分かり、目標を持つことが出来る」のように、自身の授業における問題点を認識できることを表している。

また、否定的な評価だけでなく、「自分の良い所を他者からの評価で発見することが出来、自信を持つことが出来る」といったように肯定的な評価を受けることで自信にもつながり、次回の授業や教育実習への「動機づけ」につながっていく。評価を受けることだけでも「評価されることを意識すると緊張する反面、実際に授業する緊張感が味わえた」というように、「評価を受ける緊張感」を持つことで、より授業に積極的に取り組むことが出来るようになると考えられる。

3・2 講義ビデオを用いた自己評価

講義ビデオを用いて自身の授業の自己評価を行うことに対する記述は、「客観的な自己評価」「授業中には気づかなかったことへの気づき」「視聴前の自己評価との比較」「他者評価との比較」「生徒側の視点」「意識の向上」「DVDメディアの利点」の7つの観点に分類された（Table4）。

「客観的な自己評価」は、「自分の授業を客観的に見ることが出来るので、自分の悪い点を自分自身で確認することができる」「授業中に気づけなかった板書計画の誤りや無意識の癖なども分かる」など、講義ビデオを自身で見直すことにより、自身の授業を客体視し、評価することが出来たことによる効果である。

「視聴前の自己評価との比較」は、「他者評価との比較」

は、「自分がイメージしていた授業と実際に行った授業を比較することが出来る」「客観的評価と自己評価とを比べることにより、より正確な自己評価をすることが出来るようになる」といったように、授業後に得られた評価（自己評価・他者評価）と、視聴後の評価を比較することで、それぞれの評価の妥当性を検証したり、より正確な評価を行ったりすることが出来るようになっていく。

「生徒側の視点」は他者の授業を評価する場合と同様に、自身の授業を客観的に視聴することで、生徒から見た自分の授業の姿を理解することが出来る。特に、「授業中、教師側から感じる事と、生徒側の感じ方は違い、その両方を自分の授業で感じる事により、自身の授業の反省にも大きくつながる」など、自身の授業に対して教師・生徒の両方の視点に立って見直すことが出来るという効果を意味している。

Table2 他者の授業を評価することに対する記述

1. 他者をモデルとする

- ・ 自分では思いつかなかった説明のしかたやきれいな板書のレイアウトなど、良い所を自分のものにできる
- ・ 他者の良い点を自分の行おうとする授業に取り組み、その質を向上させることに役立つ
- ・ 良くないと思った場合にはなぜ悪くなるのかを考え、少し直せばよいほうに転がるようならば取り込むようにする
- ・ 人の振り見てわが振り直せ
- ・ 他人の悪い部分を自分に当てはめてみて、少しでも似ているものがあれば、意識して直していく
- ・ 何人かの授業で気になる点があると自分は気を付けようと思って注意することが出来る
- ・ 自分にはない考え方を知ることができ、それを反映することで、自分の授業をより良くすることが出来る
- ・ 他者の授業を様々な点に注意しながら見ることは、自身の授業に大いに役立つ
- ・ 他人の授業を見てよくない点があれば自分はそうならないように気をつけるし、意識することが出来る
- ・ 良い意味で他人のアイデアを盗み、自分の授業に役立てることが出来る自分が評価した点を意識して直していけば、もっと良い授業を行うことが出来る

2. 他者と自身との比較

- ・ 他者に悪いところを指摘してあげるで、それと同時に自分の授業と照らし合わせてみる
- ・ 自分のやった授業の良い所や悪い所がさらに見つかるようになる
- ・ 自分とは、授業の進め方や指導案の書き方、時間配分など考えが異なるため、どちらの方が効率よく授業を進められるかなど他者と自分を比較することが出来る
- ・ 自分自身の授業を振り返り、他者と比較して自分の授業はどうであったかを考えることが出来る
- ・ 失敗や注意すべき場所を見つけた場合などは、自分も同じ失敗をしてないかどうか再度確認することが出来る

3. 自身の向上

- ・ 指摘する事で、自分もどんなところに注意すれば良いか分かる
- ・ 授業の組み立て方では、人それぞれまったく違うので、とても良い勉強になる
- ・ 自分の授業にも改善できたり、アイデアを取り入れたり様々な勉強になる役割があった
- ・ 生徒を積極的に授業に参加させることが重要であると気づかされた
- ・ 他者の授業を観察することで、授業をしっかり受けることが出来、自分の授業を設計するときに変役に立つ
- ・ 自分が考えている以外の授業の仕方を見ることが出来たので、自分が考えつく授業の幅が広がった
- ・ 実施に際しての心構えや進行の仕方を学ぶことが出来る
- ・ 自分に足りないところを参考にすることが出来る
- ・ 人の授業を受けてみて初めて分かる部分とか考え直す部分がたくさんあった

4. お互いの向上

- ・ お互いがお互いに勉強になる
- ・ 他者の授業の良いところ悪いところを判断することができ、それを自分に当てはめることで、良いところはまねをして、悪いところは自分も気をつけるというように、他者も自分も成長することが出来る

5. 評価能力の向上

- ・ 自分だったらどうするかを頭において何度も見ることで、どのように授業をすれば良いのかも慣れによって分かるようになる
- ・ 相手を評価することにより、自己評価も出来るようになる
- ・ 生徒が見るポイントを掘り下げれることで、自分が教壇に立ったとき、チェックされるポイントを把握することが出来る
- ・ 評価と授業を繰り返す事で、知識や技術だけでなく経験を得る
- ・ たくさんの人の授業を見ることによっていい所も見え、悪いところも見えるので、これは良い、これは悪いというのが具体的に分かって自分の授業に生かしやすい

6. 生徒視点の取得

- ・ 自分自身が生徒の立場になることで、ただ説明するだけの授業や、薄暗いパワーポイントの授業では眠くなってしまふなど、生徒の立場になって考えることが出来る
- ・ 生徒側の立場になり、どういった先生の授業が分かりやすく、どういったところが分かりにくいかが客観的に分かる

「意識の向上」は、「自分の授業を本当に客観的に見ることが出来るので、次回の授業では悪い所を改善しなければという思いになる」といったように、自身の授業の

様子を見ることにより、より具体的な授業へのイメージが沸き、2回目の模擬授業や教育実習への意識を高めていることがうかがえる。

Table3 他者に自身の授業の評価を受けることに対する記述

1. 自分が気づけなかった点への気づき

- ・ 自分では気づけなかった悪い点を知ることができる
- ・ 自分が気づけなかった問題点の確認
- ・ 自分では気がつかない点に気がつくことが出来る
- ・ 自分のどこが悪いか一目瞭然になり、自分では気づいていないようなところがすぐに分かる
- ・ 客観的な自分を知ることが出来る
- ・ 自分では気づけなかった問題点や、授業の難易度がどうであったかなど、他者の立場からどう思われているかを知ることが出来る
- ・ 自分では気がつかないミスに気づいてもらうことが出来る
- ・ 自分では気づくことが出来なかったことや、気づいていてもどう直せばよいかわからなかったことなど気づかせてもらえた

2. 自己評価との比較

- ・ 自分が感じた問題点と一致しているかどうかの確認
- ・ 自分では良いと思ってやっていることでも他の人から見ると、あまり良く思われていないところもあり、見直すことが出来る
- ・ 自分では良いと思って行っていたことが、生徒の目線で見た場合、あまり良い印象を受けないことがあった

3. 多面的な評価観点への気づき

- ・ 他人の目にはどう映っているのかという事を知ることができ、複数の視点からの意見を得られる
- ・ 多数人が思うことを知ることが出来、次の授業には直したほうが良い優先順位をある程度知ることが出来る
- ・ 人による感じ方の違い
- ・ 他者から見て自分がどのような授業をしているのかが分かる
- ・ 価値観は人それぞれ違うので、他者の評価をもらうことで、よりそれに近い形の反省が出来る
- ・ 生徒側から見た意見や考え方、感じ方を知ることが出来る
- ・ 自分がいいと思ってても人から見ただめだったら、ずっと自己満足で生徒は生徒、自分は自分みたいな、ひとりの授業みたいになってしまう
- ・ 評価されたコメントなどを元に、いろいろな生徒、人間がいるのだということを理解し、授業を行う参考に出来たらよい

4. 問題点の明確化

- ・ 意見を参考にして、次回の授業では、特に声や板書など授業の内容にかかわらず、生徒が印象を受けやすいものについて考えることが出来る
- ・ 他者から評価されることによって、自分自身では見えにくいところも明確に指摘してもらえるので、次回の授業までの参考になり改善できる
- ・ 2回目の授業では何を気をつけるべきか、本番ではどんな授業をすればよいかなどがはっきり分かり、目標を持つことが出来る
- ・ 自分の授業のどこを改善すれば良いか明確となったり、他者から見て、自分の授業のどこを改善すれば良いかということも分かる
- ・ ほとんど全員の人が1回目より2回目の方がいい授業をしていたように感じるが、それは、この他者からの評価がたくさん影響している
- ・ 自分の悪いところや、注意すべきところは、他者からの評価で改めて思い知らされることもあり、次回からそのことに注意して授業を進めることが出来る

5. 動機づけ

- ・ 自分の良い所を他者からの評価で発見することが出来、自信を持つことが出来る
- ・ 授業のたびに反省ばかりし、「あれが悪かった」「これが悪かった」と落ち込んでしまいがちだったが、良かったところもあるのだと気づかせてくれた
- ・ 人前で授業し評価してもらうことで、自分への自信にもつながる
- ・ 真剣に授業に取り組むことにもつながる
- ・ 自分の授業スタイルの中でよい点をほめてもらう事により自信もつき、次回の授業への励みにもなった
- ・ ほめてもらえたところは、次回から自信を持ってやる事が出来る
- ・ 他者からの評価が上がれば意欲が出る

6. 評価を受ける緊張感

- ・ 評価されることを意識すると緊張する反面、実際に授業する緊張感が味わえた
- ・ 授業をしている最中は見られているという緊張感の中、授業をしているので、声の大きさや時間、黒板の書き方などをとても注意することが出来る

そして「DVD メディアの利点」は、「何度も見ることができるので、細かい点まで観察することができる」「文字だけでは表現できない情報を動画という形式で視聴することで、より詳しく知ることが出来る」など、記録メディアである、DVD の効果に言及している。通常、授業評価は言語的手段によるものに限られるが、記録された

映像で見ることにより、言語化しにくい情報まで得られたといえる。

4. 実践の効果の検討

4.1 ピア・レビュー（相互評価）の効果

ピア・レビューの利点として、お互いに評価を行う場

Table4 講義ビデオを用いて自身の授業の自己評価を行うことに対する記述

1. 客観的な自己評価

- ・ 自分の授業を客観的に見ることができるので、自分の悪い点を自分自身で確認することができる
- ・ いい面にも悪い面にも終わった後の感想が得られる
- ・ 他者の意見よりも明確に欠点を知ることが出来、よりはっきりとした次への目標をたてる事が出来る
- ・ 自分自身で長所・短所を発見できる
- ・ 違う視点から自分の見ることが出来る
- ・ 自分で自分の悪いところを見れば他者の評価を受けたとき以上にここは直すべきだと思える事が出来る
- ・ 自分自身のいい所、悪い所が一目瞭然として分かる

2. 授業中には気づかなかったことへの気づき

- ・ 意外に自分では気をつけていても、実際見ることで、改めて発見したことが多かった
- ・ 文字だけでは分かりにくい部分もどこが悪いかが一目で分かる
- ・ 授業の内容だけでなくしゃべり方の癖や歩き方、姿勢など自分自身が人にどう印象を与えているか知ることが出来る
- ・ 他の人にも指摘されにくい、自分でも気づいていないところが分かる
- ・ 自分が授業をしている時には気づくことが出来ないことでもビデオを見ることによって気づかされるので、自分の出来てないところや直した方がいい点を、他者の評価を通してではなく、自分で気づくことが出来る
- ・ 授業中に気づけなかった板書計画の誤りや無意識の癖なども分かる
- ・ 自分に向いている授業のやり方や進め方が分かるようになった
- ・ 他人が見ても気づかないような小さなことや癖のようなものを発見できる

3. 視聴前の自己評価との比較

- ・ 授業について、しゃべっている時と聞いているときではこんなに違うものなのかと感じたことが一番印象に残っている
- ・ 自分がイメージしていた授業と実際に行った授業を比較することが出来る
- ・ 自分が思っていたイメージと実際にやった授業とのギャップを見ることが出来る

4. 他者評価との比較

- ・ 他者の評価をその場では理解することが出来ないことでも視聴することで気づくことが出来る
- ・ 他者からの評価と照らし合わせることでさらに自分の授業の反省点を見つけることが出来る
- ・ 客観的評価と自己評価とを比べることにより、より正確な自己評価をすることが出来るようになる

5. 生徒側の視点

- ・ 自分の行った授業を生徒側から見ることになり、生徒たちからどういった感想をもたれるかということを知る程度得ることが出来る
- ・ 生徒がどのように自分の授業を受けているのかということが分かる
- ・ 授業中、教師側から感じる事と、生徒側の感じ方は違い、その両方を自分の授業で感じる事により、自身の授業の反省にも大きくつながる

6. 意識の向上

- ・ 次の授業での緊張が和らいだり、てんぱったりしなくなった
- ・ 自身の意識の向上にもつながるため、自身の授業を他者になったつもりで視聴できたこのスタイルは自身の授業の設計や実施に大きく貢献する
- ・ 自分の授業を本当に客観的に見ることが出来るので、次回の授業では悪い所を改善しなければという思いになる

7. DVDメディアの利点

- ・ 何度も見ることができるので、細かい点まで観察することができる
- ・ 文字だけでは表現できない情報を動画という形式で視聴することで、より詳しく知ることが出来る
- ・ 何度も繰り返し見ることが出来るので、1回見ただけでは気づかない細かい部分に注目することが出来、今後の課題に出来る
- ・ 授業を終えた後でもう一度振り返ることができ、やっただけの授業にならなかった
- ・ 撮影したものを保存しておけば何回も見直せるので、今後の授業のために役立つ
- ・ 何回も見ることや同じ所を見ることが出来るため、問題が発見できた場合、何がいけなかったのか、どう進めていけばいいかを、考えやすい

合、教員からの評価と異なり、対等な立場で評価できることがあげられる。同じ立場の学生からの評価であるため、批判的な指摘であっても比較的容易に受け入れることが可能となる。また、お互いに評価を行うため、自分の授業と比較しながらの評価となり、評価基準がより明確になる。こうした評価能力の向上が、自身の授業に対して多面的な観点で見直す能力の向上へとつながっていくことになる。

次に、他者をモデルとして、自身の指導方法、授業計画に取り入れていくことがあげられる。特に他者を評価することの意義において見られたが、自分の授業と比較してよいと思うことは取り入れ、改善すべき点は自身の授業においても注意していく姿勢が形成されていた。ただ授業を見ているだけではなかなか自身の授業とは結び付けにくい、他者に対して改善点を指摘することで、自分も同様のことに気をつけようとする意識が形成されることとなったと考えられる。

そして、評価は数値のみではなく、適宜コメントを記入することとしていた。また、このコメントは、相手の授業をより良くすることを念頭において記述するよう教示した。そのため、学生は模擬授業にて良くなかったことを指摘するだけに留めず、どのように改善したら良いかまでを評価コメントとして記述していた。改善コメントおよび良かった点を指摘するコメントを受けて、授業者の動機づけが高まることとなったといえよう。

4・2 講義ビデオを用いた効果

自身の講義ビデオを自己視聴することで、客観的に自身の姿をとらえることができる点が、本実践における最大の効果であるといえよう。

客観的な視点で自身の姿をとらえることで、評価の客観性が高められるうえに、他者の評価の確認も可能となる。授業評価は直接コメントを述べる場合でも、評価用紙を用いる場合でも、伝達内容は言語的なものに限定される。言語的な評価は、評価者の意図と授業者の解釈が一致しないと、評価の効果は弱くなる。なぜそのような評価を受けたのか、ということに対する解釈は言語的な情報のみでの判断では不十分な場面が多い。評価者の指摘の意図を、授業者がビデオを視聴しながら確認することで、評価内容を補完する役割を果たしていたと考えられる。

次に自己評価という観点から見ると、自身が授業中に意識している行動には自己評価は可能であるが、無意識の行動までは自己評価を行うことはできない。他者に指摘されて初めて気づくことだけでなく、講義ビデオを自己視聴することで気づくことも多く存在する。また、前回の授業の反省に基づいて次の授業に目標を立てた場

合、その目標が果たせたかどうかを確認するためには、他者評価よりも講義ビデオを用いた自己評価のほうが適切な評価が行えると考えられる。

こうした、自身の授業に対して、目標を立て客観的な自己評価を加える活動は自己モデリング活動に他ならない。授業では、講義ビデオを渡す際にどのように活用するかについて、具体的に解説はしていない。ビデオを自分で視聴して、反省文の提出を求めただけであった。それにもかかわらず学生は自分なりの見方で講義ビデオを視聴し活用していった。

特に、自己評価を授業後の感想だけに留めず、他の学生の評価の確認、自己評価の確認、生徒の視点に立った評価等、多面的に自身の講義を評価できるようになっていることが記述から伺える。授業づくりに対する具体的な目標設定にもつながっており、抽象的な感想から、具体的な課題設定への転換を促す教材としての役割を果たしたと考えられる。

5. おわりに

2005年度までと比較して、教員側の負担も大きく軽減された。DVカセットで記録した場合、ビデオCDを作成するコスト、あるいは学生の申し出に応じてDVカセットとDVカメラを貸し出す作業があった。2006年度は、撮影したその場で学生にDVDメディアを渡すため、事前のメディアの初期化作業以外、撮影に関する授業前後の作業を必要としなくなった。学生にもその場で渡せるということで、授業直後のまだ授業の余韻が残っている段階で自身の授業が視聴できたことは貴重な体験であったようだ。

教材の活用という面でもDVカセットからDVDに変更したメリットは大きく、再生用機材としてパソコンを利用できたことで、学生も気軽に視聴できることにつながったのではないかと考えられる。その反面、教員側にマスターテープが残らないため、学生の模擬授業を最終評価に加えるための資料を手元に保管できなかった。最終レポート提出時に添付資料として提出を求める必要があるかもしれない。

また、こうした講義ビデオを利用した指導は教員養成だけではなく、大学におけるFD活動の1つの方法として活用している大学もある（cf. 山形大学、鹿児島国際大学）。これらの大学では、授業を公開し、学生からの評価を受けるだけでなく、他の教員からの評価、講義ビデオを用いた自己評価および検討会などが行われている。本実践で得られた知見は、教職課程の学生のみならず、これらのFD活動における教員研修・公開授業にも適用し、活用することが可能ではないかと考えられる。

引用文献

- 伊藤秀子 2003 大学授業における学習者と教授者の主体的参加支援 メディア教育開発センター研究報告, 45, 3-30.
- 伊藤秀子 2004 大学授業における学習者と教授者の主体的参加を促す要因 日本教育工学会論文誌, 28(Suppl.), 241-244.
- 伊藤秀子 2005 自己モデリング, 自己効力, 評価による大学授業改善 日本教育工学会論文誌, 29(Suppl.), 189-192.
- 木内 剛 2003 教育の技術 柴田義松・山崎準二(編) 教育の方法と技術, Pp100-130.
- 高乗秀明・浅井和行 2003 コミュニケーションとメディアを生かした授業 - 新時代の授業実践力を培う基礎演習 - 日本文教出版 .
(受理 平成 19 年 3 月 19 日)